

第 22 回 災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました (2019/7/5)

テーマ：感染症危機管理の現場から
場所：東北大学医学部（宮城県仙台市）

7月5日（金）に本学医学部6号館1階カンファレンス室にて、厚生労働省 健康局結核感染症課から井手一彦 先生を講師としてお招きして、第 22 回災害科学国際研究所 学際研究推進セミナー（主催：災害科学国際研究所 災害と健康ユニット）を開催致しました。本セミナーは災害時の危機管理に対する日本の取り組みと現状を World Wide な視点で学び、災害時の危機管理における学際融合の重要性を学ぶと共に、世界で活躍できる人材の育成を目的に企画されたものです。井手講師は、世界保健機構（WHO）で世界レベルの災害に対する危機管理について学び、この経験を活かし現在は国内で検疫官として活躍されています。今回、井手講師には当研究所災害医学研究部門 災害感染症学分野 児玉栄一 教授の司会の元、『感染症危機管理の現場から』という題で、WHO の意思決定の仕組みや活動内容、バングラディッシュのロヒンギャ難民キャンプで経験した危機管理の現状と限界などについてご講演いただきました。

初めに、WHO が 194 の加盟国・地域の保健担当者が専門家だけでなく様々な場所、人と情報を共有しながら意思決定を行う場であり、日々、世界中から災害になり得る膨大な事象が報告されています。これらの情報から、「知覚」→「確認」→「リスク評価・グレーディング」→「現地調査・対策」というステップを経て Outbreak を起こす事案を抽出、対応・対策に関する意思決定が行われ、実際の災害現場に赴き、「調整と交渉」を通して地域保健や衛生管理の向上を行うということをご紹介いただきました。次に、支援を受け入れる側の医療の質、物理的な質（建物の強度による病床数の制限）、人材的な制限（医療従事者の数）などを例に挙げ、ロヒンギャ難民キャンプで経験された支援の限界に関する話題を提供していただきました。また、家族に少しでも何かしたいとの思いから、支援物資をお金に変えてしまうといった事例なども紹介していただきました。更に、難民キャンプの中にいる人々は支援により学校に通う事が出来ても、難民キャンプの外に共住している現地住民の貧困層に位置する人々は通う事が出来ないという支援の抱える矛盾についても言及され、どこまで支援すべきなのかという社会的な問題についてもご報告いただきました。

講演後の討論では、世界で活躍する為に重要となる知識や能力に関する質問もあり、本セミナーは、当初の目的である危機管理における学際融合の重要性認知と世界で活躍できる人材の育成に関して一石を投じる事が出来たのではないのでしょうか。



井手一彦 先生



講演の様子